

高橋昭男著

仕事文をみがく



岩波新書

795

高橋昭男著
江苏工业学院图书馆
仕事文をみがく
藏书章

岩波新書

795

高橋昭男

1936年山形県生まれ

1958年東京電機大学卒業

工業英語翻訳家をへて

現在－テクニカルライター．東海大学電子情報学部講師．NTT-AT 専任講師．日立グループ，NTT 各研究所および関連企業，NEC，沖縄電力などで「技術文章学」の講座を担当

著書－『仕事文の書き方』(岩波新書)，『ザ・テクニカルライティング』『技術系の文章作法』(共立出版)，『PL 法があなたを守る』(宝島社)，『わかりやすいマニュアルの作成法』(日経 BP 出版センター) など

仕事文をみがく

岩波新書(新赤版)795

2002年7月19日 第1刷発行

著者 たかはしあき お
高橋昭男

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷製本・法令印刷 カバー・半七印刷

© Akio Takahashi 2002

ISBN 4-00-430795-3

Printed in Japan

仕事文をみがく

目 次

1 書く技術は思考力を育てる 1

情報を見せる順序／情報の提示は論理的に／勉強＝暗記？／Howに強く What に弱い日本人／グリーンカー世界トップ10は日本車／高校教育で論理的思考の訓練を／帰納法と演繹法を知ろう

2 帰納法を活用する作文技術 21

帰納式に書かれた仕事文／もっともかんたんな帰納式仕事文／少し複雑な仕事文／帰納式情報提示のパターン／箇条書きは帰納法の応用／iモード時代に不可欠の削る技術／情報過多時代の文書管理術／報告書はA4判1枚で／文章を削るコツ／帰納式文章は昔から？／帰納式から演繹式への展開／【演習課題01】／【演習課題02】

3 演繹法を活用する作文技術 57

演繹式に書かれた仕事文／異質のことばの組み合わせ／文章を削る／論理で書く／仕事文の例／【演習課題03】／【演習課題04】／【演習課題05】

4 帰納・演繹の応用と「考える力」…… 91

論理と考える力／算数の答だっていくつもある／一人ブレインストーミングのすすめ／帰納主・演繹従型／【演習課題 06】／帰納主・演繹従型の仕事文／帰納主従型／起承転結／【演習課題 07】／「転」の心をいかそう／論理を逆手にとると笑いが生まれる／「転」の位置はどこでもいい

5 平明・率直が説得力をもつ…… 131

やさしいことばで書く／plain English に学ぶやさしい日本語／一番むずかしいカタカナ語／【演習課題 08】／『白書』では／カタカナ語の悪影響／国語審議会の提言／内容を掘り下げる／大意をつかむ／書き出しはやさしく／【演習課題 09】／「序破急」は仕事文に応用できるか？／論理にかなった文章を書くために

6 論文の論理構造…… 171

学者が書いた論文例／三段階構成法

演習課題の解答例…… 185

引用・参考文献および資料一覧…… 191

あとがき…… 195

1

書く技術は思考力を育てる

情報を見せる順序

1995 年 1 月 17 日に阪神・淡路地区を襲った大震災は、日本国中を恐怖のどん底に落としこんだ。そして、その後遺症は現在にまでおよんでいる。

以下は震災当日に報道されたニュース文である。

夜になって避難していた住民たちが自宅に帰り、
充満していたガス漏れのガスに気づかず夕食の準備や暖房のスイッチを入れ、新たな出火が起きているという情報があり、消防ではガス漏れにも十分気をつけるよう呼びかけています。

(1995 年 1 月 17 日放送のニュースより)

大震災に直撃された後の混乱時、こんな報道を聞いたらどうであろうか。「何をすべきか、何をしてはいけないのか」を瞬時に判断することができない。

この種の「ご注意文」では、絶対にしてはいけないことを真先に、短い文で伝えることが第一条件である。

文章の内容をよく読んでみる。伝えたい情報に落ちはない。しかし、これは悪文である。当時、NHK の放送用語委員であった柴田武氏(東京大学名誉教授)は、この例文を同委員会でもとりあげ、

「センテンスは短く、特に緊急時にはなおさらで、注意事項なり、重要な情報を早く伝えるべきである」

と強調し、以下のような改善案をしめした。

消防ではガス漏れにも十分気をつけるよう呼びかけています。夜避難先から帰ってきて、ガス漏れに気づかず、ガスや暖房のスイッチを入れると、新たな火事が起きます。

部屋にガスが充満しているおそれもありますから、十分気をつけるよう、消防で呼びかけています。

NHK 放送用語委員会で冒頭の文章がとりあげられたのは、意外なことからであった。この文章に対し、「問題あり」とクレームをつけたのは、日本人ではなく、アメリカのダニエル・ロング氏であった。

同氏は1997年2月、韓国の中央大学校日本語研究所が刊行する『日本研究 第12輯』に投稿した論文の中で、この例文を紹介したのである。

NHK 放送用語委員会で、柴田武氏がこの問題を提示したのは、1997年9月に札幌で開催された委員会においてである。

私がこの問題を知ったのは、震災から5年経った2000年2月の『日本語学』(明治書院)の「特集 マニュアルの言語学」によってである。私もこの特集の一部を執筆したので、情報を比較的早く知ることができた。

そして、聞き逃してしまいそんな問題をアメリカ人によって、韓国の大学学会誌にとりあげられたという事実

を直視すべきだと思った。

「やさしく，わかりやすい日本語」を求めているのは，日本人だけでなく，日本をこよなく愛する多くの外国人も同じなのである。

注意の内容をさらに，日本語能力が初級から中級程度の外国人に理解してもらえる日本語になおしてみる。

部屋に入って，ガスのにおいがするときは，すぐ窓をあけて，ガスの元栓を閉じてください。
火を使わないでください。
電気もつけしないでください。

「ご注意文」での必須事項は，「大切なことから書く」ということ，および対応策である。このケースの消防からの呼びかけには，つぎの4つの要素が含まれていれば十分である。それを，実行する順序(重要度順)で提示することも忘れてはならない。

- 部屋に入ったら，まずガスくさくないか，においで確かめる。
- くさいときは，すぐに窓をあけ，ガスの元栓を閉じる。
- 火を使わない。
- 電気もつけない。

それにしたがえば，上に提示した文章のようになろう。

情報の提示は論理的に

冒頭に提示したニュースの文章には、注意事項についての情報がきちんと盛り込まれている。それにもかかわらず「問題あり」とされたのは、情報の提示順序が悪いからである。論理にしたがっていないからである。

では、その論理とは何であろうか。『広辞苑』(第5版)には、

論理＝①思考の形式・法則。また、思考の法則的なつながり。

②実際に行われている推理の仕方。論証のすじみち。(以下略)

とある。

もう少しやさしく説明すると、論理とは、

ものを考えるときの適切な方法・手段、すじみちということになる。その論理にしたがえば、最初のニュース文は落第である。

われわれは、もう少し、論理に注目しながら文章を書くべきではないだろうか。この例は、われわれにそんなことを伝えている。

そこで、本書では、論理的な文章を書くにはどうすればよいかに迫る。読んでいくうちに了解されると思うが、論理的な文章の書き方を学ぶことは、意外な相乗効果をあげることにも期待できる。それは、「考える力」が養われることである。

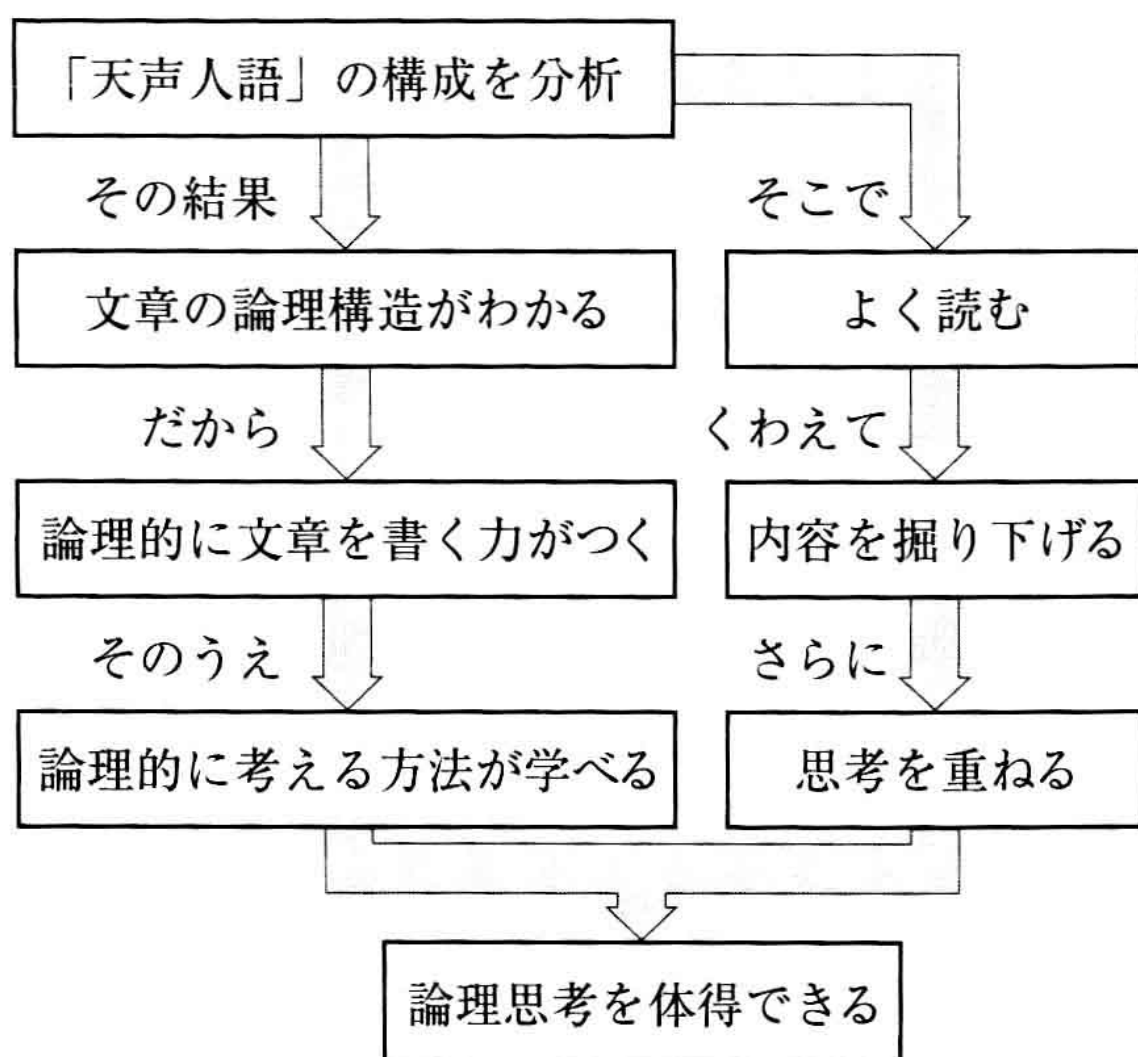
本書では論理的な文章を書くための手段として、『朝日新聞』の「天声人語」を取りあげる。その理由は、た

んに「天声人語」が名文として知られているばかりでなく、やさしいことばを使った簡潔な文章として、誰もが読みなれていることにくわえ、論理的なルールにしたがっているからである。これは、いくつかの「天声人語」を紹介していく段階で理解することができる。

そして、「天声人語」の論理構造を学んでいくことにより、物事を正しい方法で考えていく力が養成される。

くわえて、「天声人語」を深く読み、内容を掘り下げていく過程で、考える力が倍増される。

これを図示すると、以下のようなになる。



「天声人語」を分析しながら文章作法を学ぶ学習をくりかえしていくうちに、以上のような過程を体験するこ

とで、「考える力」を伸ばすことができる。

勉強＝暗記？

1981 年、ノーベル化学賞を受賞した福井謙一先生(故人)は、当時の中学高校生の「考える力」の乏しさを嘆いておられた。近年、2000 年、2001 年と 2 年連続でノーベル化学賞が日本人の学者に授けられた。白川英樹・筑波大学名誉教授、そして野依^{のより}良治・名古屋大学教授のお二人である。

新聞などの会見で、いずれの方も「学問とは考えることである」と異口同音に述べている。本書 3 章でとりあげる「天声人語」も、

考える力が乏しいのは学生だけではない、学会発表の場でさえ、「どう考えるか」ではなく「〇〇を知っている」という論議がさかんにおこなわれている。

といった意見を述べている。どうやらその原因は、中高生の受験意識にあるようだ。

大手の通信教育会社が、全国の中学生を対象にしたアンケートの結果を発表した。公立中では 2002 年から生徒の自主性を重視した「総合的な学習の時間」が開始されるが、長年つづいてきた「勉強＝暗記」という意識は変わりそうにない。調査対象となった約 2500 人の公立中学生の 67% が、勉強は暗記である、と答えている。それに対して勉強＝考えること、と答えたのは 30% で

あった。(2001.11.20『朝日新聞』夕刊より)

原因を中学生の受験意識と述べたが、親、教師、入学試験の出題者側のいずれにも責任がある。そういう私も中学高校では暗記を強いられた。まさに勉強＝暗記の連続だった。とうぶんは改善の見込みなしといったところである。

How に強く What に弱い日本人

これは、先日 NHK で放映された教養番組に登場した大学教授の発言である。

ラジオを発明したのはアメリカ人である。そしてトランジスタを発明したのもショックレーを中心とする3人のアメリカ人技術者である。しかし、ラジオとトランジスタを組み合わせて、小型の携帯ラジオを世界的に普及させたのは、日本人の力である。開発に弱い、応用に強いのが日本人である、ということは世界的に知られている。

発想する力の弱さ、これは「考える力」の不足からきた結果である。ノーベル賞の受賞者たちは、それを嘆いているのである。

しかし、日本人の得意な How が What に勝る成果を生み出す場合もある。小型の携帯ラジオもそうであるが、こんな How もある。

グリーンカー世界トップ10は日本車

アメリカの非営利環境団体「エネルギー効率経済のた

めの米国評議会(ACEEE)」は2002年2月5日、排ガスと燃費、製造にともなう環境負荷を総合評価した、グリーンカー(環境配慮型自動車)のリストを発表した。対象は、現在アメリカの通常ルートで販売されている約3300車種であり、その中で日本車が上位10車種を独占した。

1位はホンダのインサイトで、ガソリンエンジンと電気モーターを積んだハイブリッド車。2位もホンダのシビック GX、3位はトヨタの電気自動車RAV4である。(2002.2.6『朝日新聞』夕刊より)

自動車を発明したのは日本人ではない。ガソリンエンジンを開発したのも日本人ではない。

しかし、排ガスの放出を極端に減らしたハイブリッド車や電気自動車を実用化したのは日本人である。これはまさにHowの力である。

Howに強くWhatに弱い日本人、といわれる原因はこのへんにある。

ちなみに、自動車の実用化に成功したのは、ドイツ人のG.ダイムラーである。彼は1885年、ガソリンエンジンで走る二輪車(シュトゥットガルトのダイムラー・ベンツ博物館所蔵)を発明、同年、同じくドイツ人のC.ベンツもガソリンエンジン三輪車(ミュンヘン科学博物館所蔵)の実用化に成功した。

そして、100年の長きにわたり、ガソリンエンジン車の独占市場がつづいた。しかし、排ガスによる公害を低減でき、低燃費で走る車が時代のニーズとなったため、

各メーカーは低公害車の開発にしのぎを削った。その結果がハイブリッド車や電気自動車である。第3位、トヨタのRAV4は完全な電気自動車である。

このように、ガソリンから電気主導型へ動力を変えることによって、低公害車、低燃費車が完成した。ところが、これには興味深い話がからんでいる。

自動車が発明された当初は、蒸気自動車か電気自動車であった。100年前の自動車の原動力は電気だったのである。19世紀末から20世紀はじめまで、一時的に活躍した電気自動車は、1回の充電による走行距離が短く、しかも重い電池を数多く積むために、室内空間がせまくなるなどの理由により、ガソリン車にその座を明け渡した。(参考『大百科事典』[平凡社])

そして、21世紀にいたり、ふたたび電気自動車が日の当たるステージに登場した。100年前の基本技術にたどりついたのである。

もし、ガソリンエンジンが開発されていなかったら、回り道をせずにもっと早く電気自動車が開発されていたのではないかと考えるのは早計だろうか。

「何をつくり出すか」と「どのように改善するか」の、いずれが大切であるかを判定することには無理がともなう。しかし、その両者に共通の資質が「考える力」であることには異論がないだろう。

高校教育で論理的思考の訓練を

暗記重視の教育現場に対する危機感のあらわれなのだ

ろうか。文部科学大臣の諮問機関である中央教育審議会が、2002年2月21日、「高校生の段階から物事を論理的に考える訓練が必要だとして、高校生にも卒業論文を課す」などの具体案を盛りこんだ答申を提出した。
(2002.2.21『日本経済新聞』夕刊より)

さらに、これまで主に大学にゆだねていた教養教育を、幼児期から各発達段階に応じて実施すべきである、と指摘。自然科学に必要な論理的思考力や表現力などの基盤として、国語力を向上させる必要性を述べている。

その具体策として、高校段階では「物事を、自分の頭で納得がいくまで論理的に粘り強く考える訓練をし、それを習慣づけていく必要がある」と指摘し、「卒業論文」のような形で、関心のあるテーマについて情報を集め、まとまった文章で表現することによって、その効果をあげるよう提案した。

また、考える力を向上させるため、文学、詩歌の古典や国内外の名著の中から「必読書」を30点ほど選定し、卒業までのあいだに生徒に読むよう勧める、というアイデアも盛りこんだ。

また2001年11月17日の『朝日新聞』朝刊は、新司法試験に長文問題を出題する考えをとりいれた基本方針が明らかになったと報じている。現在の課題では「反射神経を問うような試験になっている」ことへの反省を含めてのことである。A4判1~2枚の長文問題ひとつを数時間かけて答える方式が検討されている。

文章を深く掘り下げて理解する力が必要とされる時代